

に葬られた。

オクムラハルヨシ 奥村温良 加賀藩の老

臣奥村氏支家の第五代。蕙輝の第五男。元禄六年二月廿六日出生。通稱對馬・内記。見明敬の養嗣子となり、寶永三年八月十八日遺知一萬七千四百五十石(内三千石與力知)を賜はり、正徳の初人持組頭に任じ、元文元年十月四日享年四十四を以て歿。法號榮泉軒一相貫道居士。野田山に葬られた。温良字は伯恭、康哉又は榮泉と號し、武技を嗜み、善書の藝があつた。

オクムラハンベエ 奥村半兵衛 前田利家に仕へて千石を領し、足輕頭に任じた。子孫相繼いで藩に仕へる。

オクムラヒサフサ 奥村久房 加賀藩の老臣奥村隆振の嫡子。寶曆十年出生。通稱雄五郎・兵部。初諱厚本。寛政五年五月朔日隆振の遺跡として新知二千石(内五百石與力知)を賜ひ、文政四年八月二日享年六十二を以て歿した。法號大仙院佛山良廣居士、野田山に葬られた。

オクムラヒデサネ 奥村榮實 加賀藩の老臣奥村氏支家の第十一代。河内守尙寛の第四子。寛政四年出生、母は大善厚曹の女。通稱義十郎、後に助右衛門と改む。初諱爲實。文化元年齡十三にして父の遺知一萬七千石(内千五百石與力知)を嗣ぎ、三年年寄庶見習を命ぜられた。文政元年榮實事を以て藩侯齊廣の諱を得、月番・加判以下一切の職を解き、謁見を禁ぜられたが、後謁見のみを許され、三年十二月十六日從五位下伊豫守に任じ、七年十二月三十日改めて丹後守と稱した。この年齊廣卒し、齊泰政を親らした、齊泰は深

く榮實を信じ、屢人を介してその意見を徹し、従つて榮實の言動自ら藩論の指南となるに至つた。後齊泰は榮實の力によつて政局を打開せんと欲し、天保七年榮實に優旨を傳へて月番・加判の職を授けんとしたが、榮實は先侯の諱を得たるを以て、これを固辭し、唯日々政廳に出で、樞機に參することを請し、爾後遠逝するまで、藩の政治は多くその策謀に出た。榮實の卒去は天保十四年八月九日に在つて、享年五十二。法號慎徳院(後諱觀院)翠岸道活居士。野田山に葬られた。榮實止齋と號し、又雅名を平豊武又は豊武彦といひ、古今の書讀まざるなく、特に國學に通じてゐた。嘗て古言衣延辨を著し、又平田篤胤の靈の眞柱によりて、國典異證を編し、文政の末には富士谷御杖を延いて歌道を開き、且つ田中躬之に和歌の點削を受けた。その他の著に止齋漫筆・官服問書・徵法考・大學類典・卑陋瑣言・奥村系譜異聞等がある。

オクムラヒロタカ 奥村照殿 加賀藩の老臣奥村氏支家の第八代。温良の五男。享保十五年出生。初名喜十郎、後内記。易直の末期養子となり、寛保三年九月十三日遺領一萬石(内二千石與力知)を嗣ぎ、延享三年十月六日歿。享年十七。法號峯嶽院義雲全忠居士。野田山に葬られた。

オクムラマゴスケ 奥村孫助 父長右衛門は前田利春に仕へた人。孫助天正十年利家の石動山攻撃に従ひ、十一年四月二十日柳瀬陣に討死した。子孫相繼いで藩に仕へる。

オクムラヤササダ 奥村易貞 通稱又十郎。易英の第二子。父の遺知の内二千石を配分せられ、人持組に列し、寛文中奏者役・火消役に歷任した。貞享三年歿、年五十五。

オクムラヤステル 奥村庶輝 加賀藩の老臣奥村氏支家の第三代。庶輝の嫡子。承應二年十月五日出生。通稱千松・大藏・兵部。因幡・豊岐・丹波。初諱和廣・和長・和貴。寛文六年十四歳の時初めて前田綱紀に仕へ、延寶三年近習取次を命ぜられ、四年七月新知千五百石を受け、七年十二月八百石を増し、若年寄に進み、天和三年三月また千七百石を加へ、その内五百石を與力知とし、貞享三年十一月家老に陞り、更に千石を加へ、内五百石を與力知とした。是を以て前後祿併せて五千石(内與力知千石)となり、四年十月更に父の遺領一萬二千四百五十石を襲ぎ、初め領する所と共に一萬七千四百五十石(内三千石與力知)を受け、人持組頭に任ぜられた。寶永元年十二月從五位下丹波守に叙任し、二年閏四月二十日享年五十三で歿。法號江府院俊明徹樹居士。野田山に葬られた。庶輝一名は宣、字は俊明、測守・耕心・誠齋・敏樹・梅徑・郁文章・江南軒竹所主人等と號した。人と爲り清貞雅操、未だ冠せぬ時から教を朱舜水に受け、憲輝の名も亦舜水の命する所で、舜水は爲にその説を作つた。誠齋記一篇も同じく舜水の作る所である。

オクムラヤスナホ 奥村易直 加賀藩の老臣奥村氏支家の第七代。温良の四男。享保三年出生。通稱丹三郎・兵部。初諱端則。兄數馬保命の横死後、その名跡を斷絶せしめられたが、易直は元文二年閏十一月廿七日亡父内記温良の遺跡を相續し、知行一萬石(内二千石與力知)を賜ひ、寛保三年六月十八日享年十六を以て歿した。法號寧慶院中山玄道居士。野田山に葬る。

オクムラヤスノリ 奥村保命 加賀藩の老臣奥村氏支家の第六代。温良の嫡子。享保四年正月廿一日出生。通稱數馬。十四年十月朔日新知二千五百石(内五百石與力知)を賜はり、元文元年十二月廿六日父の遺知一萬七千四百五十石(内三千石與力知)を受け、二年正月十四日(十三日夜)享年十九を以て家臣笹田新右衛門の爲に殺された。法號成美軒天質文明居士。野田山に葬る。この時新右衛門も亦即時に同僚の爲に斬られたが、横死した保命の家祿は藩の法によりて没收せられる筈であつた爲、親族横山資林は之を病死として届出で、周囲の事情極めて複雑となり、一時藩中の耳目を聳動せしめたが、閏十一月廿七日に至つて藩は保命の名跡を斷絶せしめ、特に保命の弟易直をして、亡父温良の祀を繼がしめる便法を請じ、事終未した。

オクムラヤスヒデ 奥村易英 加賀藩の老臣奥村氏支家の家祖。伊豫守永福の第二子。通稱又十郎・主殿・備後・因幡。初諱榮郷。歳十四にして父と共に末森城を守り、後利長に隸して千石を賜はり、利家東征の時松枝・八王子諸城を攻め、幸いで大聖寺攻撃の際先登して二千石を加賜せられ、又大坂前役に大功を立て、四千五百石を増し、後役には金澤城